

夢の世界までの距離

安河内宏法(京都工芸繊維大学美術工芸資料館)

海くんがここ何年か制作のテーマとしている「世界の不可知性」、たとえば「世界はどこまで知ることができるのだろう」や「自分たちが知っている世界の外側には何があるのだろう」や「僕たちは、自分たちが知ることのできないことと、どう関わりあうことができるのだろうか」は、哲学や宗教の起源と関わる問いであるだろうし、いまの僕たちにとっても関心を惹く事柄である。テレビを見ても雑誌を見ても載っている占いの類は、自分たちの生きる日常世界の外部にある存在とつながっていたいという現代人の欲望の現れであるだろう。

だけど、そもそも人は「分からないこと」・「知ることができないこと」に、どれほど我慢することができるのだろうか。星占いにしあって、「今日のラッキーアイテムはクリームブリュレです」とか「今日のラッキーカラーは緑です」とか言ったりするけれど、そういうのを聞くと、自分の知らない世界をずいぶん自分の都合の良いように解釈するなあと思う。僕たちが生きる世界の外側にいる人を仮に神様と呼ぶとき、神様は本当にそんなことまで分かるのか。というか、神様、クリームブリュレ、知っているのか。

あるいは、僕たちが神様の意思を知ることができない例として、旧約聖書『創世記』第22章に載っている「イサクの燔祭」というエピソードを思い出してもいい。「神はアブラハムを試された」からはじまるこのエピソードは、神様がアブラハムに、妻サラとの間に生まれた息子イサクを犠牲に捧げるよう命令するものである。聖書の中にははっきりと書かれているわけではないものの、アブラハムはきっと息子への愛と神への信仰の葛藤で悩み、最終的に神の声に従うことを選択した。キリスト教信者の中では、このアブラハムの選択は模範的な信仰者の姿を示すものとして理解されているようだけど、仮にアブラハムが神の命令に背き、愛する息子を守ろうとしたとしても、誰が彼を批判できるだろう。

実際に、海くんがこれまで制作してきた作品を振り返ってみても、「世界の不可知性」をテーマに掲げながらも、その不可知性を都合よく解釈しているように見える作品がある。それは、2014年に発表した《人の枕で夢を見る》という作品である。この作品で海くんは、友人から枕を借りて、その枕を使って寝たときに見た夢を、テキストにし朗読し、その朗読したものを録音し鑑賞者に聞かせた。人は夢を見ようと思ってみるということができないし、夢は本人の意図とはちがったところで勝手な話を作るから、自分が分からないものや知ることができないもののモチーフとして夢を取りあげること自体は、よかったと思う。だけど、夢をテキスト化したことはどうだろう。海くんが見た夢自体は、海くんにとってよく分からないものだっただろうけど、夢を物語然としたテキストに変えてしまったせいで、夢の荒唐無稽さが鑑賞者まで届かなかったのではないだろうか。

では、本展「Blanket and Dog」の出品作品はどうだろう。本展の出品作品も、これまでと同じく「世界の不可知性」をテーマとし、そして《人の枕の夢を見る》と同じく、夢を題材として取りあげている。具体的には、海くんの友達が教えてくれたという「夢の中で犬をなでていると思ったら、目を覚ますと毛布をなでていた」という話をきっかけにして作られた映像作品、写真作品などが展示されている。

ひとまず会場に入って目立つ作品を見てみると、森の中だと思われる場所で不思議なかたちに変形させた毛布を写した写真作品や、犬を散歩させるかのように首輪とリードをつけて毛布を引きずる映像作品が見える。これらの作品で海くんがやっているのは、夢を現実の論理に落とし込み、結果として夢を矮小化してしまった《人の枕の夢を見る》とは違って、夢の中に現れた犬を尊重しつつ、それを現実の毛布を使って無理やりに再現することみたいだ。これらの作品は、なんかへんてこな感じがするけど、へんてこな感じがするということは、夢の世界を矮小化していないことの証拠だろう。

ここで海くんが書いた『展覧会について』という文章を見てみると、海くんはその文章の最後で「私たちの知ることができない世界に対して何ができるのか。目的は知ることではなく、知ることができないことを認めることだ」と書いている。たしかにさっき書いた写真作品と映像作品を見る限り、この展覧会には、現実世界では毛布を使って犬を再現することができないことを示す作品が、つまりは夢の世界と現実の世界は全然違う世界であることを認める作品が展示されているように思える。

だけど、それだけじゃない。階段側から見て奥の窓に展示された小さな写真作品と、その脇にそっけなく置かれた毛布。これらの対はどうだろう。小さな写真作品の方は、犬のかたちこそ写真の表面が削られ、もふもふ感を欠いた犬のイメージを示している。そこにもふもふ感満載の毛布が対置されるとき、人はいやおうなしに、両者のつながりを見て取ってしまうのではないか。いや「見て取ってしまう」というよりも、ちょっと分かりづらい書き方になるけれど、僕たちはそこで、自分たちがかつて触った犬や毛布のもふもふ感を思い出して、両者を不意に結びつけてしまうのではないか。

もちろん、こうしたことが起こるからと言って、「夢の中で犬をなでていると思ったら、目を覚ますと毛布をなでていた」という海くんの友人の体験を、現実世界で追体験することができるわけではない。現実世界の僕たちにとって、毛布は毛布であって、犬ではない。だけど、小さな写真作品と毛布の対を見たときに僕たちが覚える身体感覚は、夢の世界と現実の世界がそう遠くないことを教えてくれているように思える。

Blanket and dog

寺岡海

展示作品

映像作品

Blanket and Dog 6分4秒 2015年

壁面展示作品(6点)

Blanket and untitled インクジェットプリント 841×567mm 2015年

窓面展示作品(1点)

Dog and untitled インクジェットプリント 320×450mm 2015年

寺岡海 TERAOKA Kai

1987 広島県生まれ

2012 京都嵯峨芸術大学芸術学部造形学科油画分野卒業

個展

2012 「世界と私のあいだ」@KUNST ARZT

グループ展

2015 「京都-清州 現在美術の地層 2015 -状態としての存在」
@京都嵯峨芸術大学付属ギャラリー

「timelake」@新風館、ART SPOT KORIN

2014 「あれからの、未来の途中 -美術・工芸・デザインの鋭い12人展-」
@ARTZONE

「未来の途中 -美術・工芸・デザインの鋭い12人展-」

@京都工芸繊維大学美術工芸資料館

2013 「無限の数え方/How to count infinity」@KUNST ARZT

2012 「window jack project」@新風館

「Painting Point」@同時代ギャラリー

2011 「SAGA DASH!2011&SAGA DASH AWARD」

@MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY pfs/w

「one room'11」@京都嵯峨芸術大学クラブボックス

その他

2013~ 大学美術館を活用した美術工芸分野新人アーティスト育成プロジェクト

statement

私は、私がこの世界に対して不可能であることについて考えています。

例えば、私は空をとんだり、時間を止めたりすることはできません。そんな当たり前のことの原因を考えることによって、自分の身体と世界の間を考えると一つのきっかけをみつけることができます。このように世界と私の間における不可能性を考えることは、同様に可能性を考えることにつながるのではないのでしょうか。

それは世界と私の間にある関係性の輪郭を強くするためのものであり、この現実をきちんと捉えるための方法であると考えています。

展覧会について

「犬を撫でていた。目が醒めると私が撫でていたものは毛布だった。」

知人から聞いたこの夢の話がおもしろいと思った。おそらくその瞬間、毛布は毛布であると同時に夢の中では犬であった。しかし、この毛布であり犬であるというこの奇妙な状態も、現実からみればそれは毛布でしかなく、夢の中では犬でしかない。その両方の状態を確認することはできない。いざそのような、毛布が犬に化けてしまうような不安定な世界が目の前に広がっているとぞっとする。なぜならこれは空想の話ではなく、私に知覚することができないというだけの現実だからである。

私たちは私たちが存在する以上絶対に知ることができないものがある。目の前の毛布はどうしようもなく毛布である。犬であることもないことも私には確かめることはできない。そのような私たちの知ることができない世界に対して何ができるのか。目的は知ることではなく、知ることができないことを認めることだ。